

日本初の従軍看護婦

町田 栄子
(1851~1933)



出典『薩摩おごじょ 女たちの夜明け』
(春苑堂出版)

嘉永4(1851)年、鹿児島市で生まれた栄子は、明治3(1870)年に薩摩藩士、町田四郎左衛門と結婚した。

明治10(1877)年に西南戦争が勃発し、9月に西郷軍が城山にたてこもった際、栄子は城山の中腹にあった自宅を手当て所として提供し、負傷者の手当てに当たった。その近くにあった長田八郎(永田佐七とも)、囊田長傳、宮原藤八郎の屋敷は、野戦病院として主に重傷者が運び込まれた。栄子は自宅の救護活動を姑にまかせ、自分は二人のお供を連れて野戦病院で懸命な看護を行った。9月24日未明の官軍による総攻撃の際、病院を訪れた村田新八に「すぐに避難するように」と忠告を受けながらも、「どこで死ぬのも同じです」と言ってその場を離れず、看護を続けた。西郷軍が壊滅

した後、野戦病院で官軍による虐殺が始まった。三つの野戦病院のうち二カ所は、入院していた負傷兵が全て殺されてしまった。このままでは残る一カ所の兵士の命が危ない、と思った栄子は誰かに助けを求めようと、岩崎谷を駆け下りた。その途中、ある官軍の兵士と出会った。偶然にもその兵士は栄子の幼なじみであり、彼の計らいで負傷兵たちの命を救うことができた。

西南戦争で活躍した栄子は、その後日清戦争でも従軍し、熊本の陸軍予備病院に勤務した。日露戦争の頃には日赤病院看護婦宿舎の監督として後進の指導を行い、日赤看護婦の教育に一生を捧げた。

参考文献：『日赤鹿児島百年史』『不屈の系譜』『薩摩おごじょ 女たちの夜明け』『薩南血涙史』『かがやけ薩摩』『鹿児島百年(中)明治編』

すてっぷ

vol.32

男女共同参画情報誌

【発行】鹿児島市男女共同参画推進課
平成23(2011)年3月



この言葉の意味を知っていますか?

固定的性別役割分担

男女を問わず個人の能力等によって役割の分担を決めることが適当であるにもかかわらず、男性、女性という性別を理由として、役割を固定的に分けることをいいます。「男は仕事、女は家事・育児」、「男性は主要な業務、女性は補助的業務」等は固定的な考え方により、男性・女性の役割を決めている例です。

間接差別

外見上は、性別に関係ない中立的な規定、基準、慣行などが、他の性の構成員と比較して、結果として一方の性に不利益を与えるもので、業務遂行上必要となる合理性・正当性がない場合をいいます。例えば、募集・採用にあたり、一定の身長、体重、体力などを要件とし、採用される女性・男性が著しく偏ってしまう場合などが想定されます。

編集後記

少子高齢化が進み、最近、介護の問題がクローズアップされてきています。特に高齢者の介護の問題が深刻化してきております。私たちは、いつかは高齢になったり、病気になったりして、何らかの介護を受けないと生活ができなくなるかもしれません。

今、介護の多くは女性が担っている状況がありますが、今後は男性も積極的に介護に参加し、男女ともに介護を支える社会を作っていかなければなりません。

介護をする側、される側。あなたもいつかは、そのような立場になるかもしれません。今回は、男性の皆様にも、介護者の現状を知っていただき、今までの固定的観念にとらわれずに、介護と男女共同参画について考えていただけたらと思います。

すてっぷ 第32号

発行／鹿児島市市民局市民部男女共同参画推進課

〒890-0054 鹿児島市荒田1丁目4-1

電話：099(813)0852

制作／浏上印刷株式会社

【表紙解説】

年配の夫婦とその子どもたちが家族みんなで楽器を演奏することで、世代を超えた家族間のつながりを表し、介護を通じて互いに家族を支えていくことをイメージしています。

本冊子は、紙へのリサイクルに適した材料のみを用いて作成しています。

特集

介護って誰の役割？ —介護と男女共同参画—

フロントインタビュー

立命館大学産業社会学部教授・副学部長

津止 正敏さん

男性介護者の現状を知ってほしい